

## NUS Experiential Simulation Programme 報告書

医学部医学科 6年 小沢一貴

2019年7月1日から7月12日の日程で、シンガポール国立大学(以下 NUS)において、NUSの医学部5年生とともに実習に臨んだ。実習では、基本的には午前中はレクチャー、午後はグループに分かれ用意されたステーションにてトレーニングするという形式がとられていた。NUSの学生は60名おり、1グループ10人程度に分けられ、そこにYCUの学生が2人ずつ組み込まれ各ステーションを回っていった。

実習を通して最も強く感じたことは、NUSの学生の医学へのモチベーションの高さと、日本との教育方針の違いである。NUSの学生とともに過ごしていると随所でその知識量に圧倒され、また来年から医師になる者として堂々とした態度を身につけていることに驚いた。例えば、**Crisis Simulation**などの際に、薬剤を投与するとき、投与量はもちろん投与速度、希釈倍率なども含め指示を出すことができたり、**Procedural Simulation**の際に適応や禁忌、合併症を聞かれた際もスラスラと答えることができていた。さらに、患者からの問診、患者家族への説明、上級医へのコンサルトなども落ち着いてでき、日本の研修医レベルの実力に既にあるように感じた。日本の学生は疾患への治療法、治療薬を答えられるに留まっていることが多いのではないかと思う。NUSの学生はより臨床現場に即した勉強をしており、見習わなければいけないポイントであると感じた。

次に、NUSの教育とYCUの教育の方針の違いからも学ぶべきことが多いと感じた。その中で最も異なると感じたのは、実践する環境の有無である。YCUでの教育をはじめ、日本の医学教育は机上での医学知識の獲得がメインにあるように感じる。病棟実習で患者さんと関わることもあるが、基本的には見学に留まるように思う。一方でNUSでは病棟実習でも学生は患者さんとの関わりも多い上、今回のようなシミュレーショントレーニングを取り入れ、実際現場に出る前にマネキンで実践的な力を養う機会が用意されていた。学習した知識を用いる機会は、ただの知識が実体験としてより確固なものとして自身に蓄積されるため、学習効率も格段に上昇すると考えられる。特に、医療安全やプロフェッショナルリズムに関してはその授業はあるものの、それらをシミュレーターなどで体験する機会がなく、臨床に出ることに不安を感じる。今回の留学を通して、こうした実習を経験することができ、また、その重要性を認識できたことがよかったと思う。

今回の2週間で、いかに学ぶべきことがこれから多いかを改めて認識せられた。現在のひとまずの目標は国家試験に合格し、医師となることにあるが、その先を見据えての勉強をする必要性を認識できたことはとてもよかったと思う。NUSの学生も長時間に及ぶハードなスケジュールに疲れは見えたが、どの生徒も活き活きと実習に当たっており、夜遅くまで続いたレクチャーでも積極的に質問は飛び交い、医学への高いモチベーションを感じた。自身もこうした姿勢をみならってこれからの実習に臨みたいと感じた。

またこれまで私は臨床医として生きていくことを考えていたが、教育者として学生の指導にあたるという仕事の面白さとやりがいを感じた。というのも、今回のシミュレーショ

ントレーニングに特化した実習を日本でもぜひ取り入れるべきであり、それを実践したいと考えたからである。学生としても、ただひたすらに教科書と向きあうより、その知識たちを実際に応用する学習の方が有意義な時間であると思う。そして、その経験によって、大学卒業後、早く現場で活躍できる存在になり、これは日本の医療レベルを向上させるに違いない。教育者という立場で日本の医学教育に関わり、日本の医療者のレベルの向上を目指すことは非常に魅力的な仕事であると感じた。

最後に、このたびの留学に際してご支援を賜りました倶進会をはじめとする全ての関係者の皆様に、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。